



ウガンダ カラモジャにて（2026年3月撮影）

# 結晶母

願いをチカラに、平和をつくる

— 2026. 春号 —

Newsletter Kesho-mo



武器ではなく人生を



# 元子ども兵500人の帰還・紛争終結プロジェクト

今こそ市民の力で平和を取り戻す



なぜ今、5,000万円のクラウドファンディングに挑戦するのか

## 私たちの決意

理事長 吉田真衣

テレビを付けければ戦火に追われる人々の姿が映し出され、SNSを開けば憎しみの連鎖が止まらない。世界中に戦争があふれる今、私たちは時として自分の無力さに打ちひしがれそうになります。

「何かできないか」「平和を願うだけでは、現実が変わらないのではないか」

そんな行き場のない想いを抱えている皆さまと共に、私は一つの「証明」をしたと思っています。それは、「市民の力で、一つの紛争を終わらせることができる」という証明です。

### 21年前の私の原点

21年前、私はテラ・ルネッサンスインターンとして、ウガンダ北部を訪れました。「元子ども兵ってどんな人なんだろう」「暴力的なのか」「トラウマに苦しんでいるのか」と想像しながら、初めて、私たちの支援を受ける「1期生」に会いました。

真剣な眼差しで職業訓練を受け、給食の時間は仲間と談笑する彼女らの姿に、私の想像は見事に裏切られました。年齢も私とほとんど変わらない彼女たちは私と何も変わらない人たちだったので。



スマイルハウス1期生たちと（2026年3月）21年前に出会い、人間の強さを教えてくれたのが彼女たちです。

しかし、一人の少女兵が漏らした言葉に、私は社会復帰の過酷な現実も突きつけられました。「今の生活が苦しくて、ブッシュ（戦場）に戻りたくない。」

それから21年、私たちはこれまで317名の元子ども兵の社会復帰を支援してきました。さまざまな困難に直面しながらも自立を果たしていく彼女たちの姿にたくさんの勇気を受け取りました。

一方で、彼女たちの苦しみの根源でもあるLRA紛争は終わらないまま。「社会復帰支援だけでは、根本的な解決にはならない。」私たちはそんな葛藤を抱えて活動を続けていました。



理事長 吉田真衣

### 「支援」から「紛争終結」への挑戦

転機は2023年。今なお武装勢力「神の抵抗軍（LRA）」に残る兵士の帰還支援に乗り出すことになりました。

現地のNGO、そして私たちの施設の卒業生らによる粘り強い呼びかけの結果、141名の帰還が実現したのです。

「帰還を支援して、全員が帰還すれば、LRAを解体できる。」そんな思いが私たちの中に力強く芽生えました。

それから、3年。141名に加えて、さらに56名がLRAから離脱し、帰還を果たすことができました。今も、ウガンダでは小川が関係国政府や武装勢力と直接交渉を続けています。

平和への第一歩を共に。この歩みを止めたくない。

今、アフリカで最も長く続くLRA紛争の終結に手が届きそうなどころまで来ています。しかし、彼らを帰還させ、社会復帰に導くには、帰還の調整、彼らの移送、帰還後の社会復帰支援と、多額の費用が必要となります。

そこで、今回5000万円を目標とするクラウドファンディングを立ち上げました。

500名の元子ども兵たちが銃を置き、再び人間としての尊厳を取り戻していく。

世界各地で戦火が広がる今だからこそ、市民の力、対話の力で一つでも戦争を終わらせる。そんな決意を持って、今回クラウドファンディングに挑戦します。

ぜひ、皆さんの力で、一緒に平和を取り戻しましょう。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

▼クラウドファンディングへの参加はこちらから



readyfor.jp/projects/returnees01

通常のご寄付も歓迎しております

2026年3月、あらたに25名の元子ども兵たちを保護し、コンゴの安全な場所に移送することに成功しました。国境の村から、悪路を四輪駆動車2台と、バイクを駆使して、2日間かけて連れ帰ることができました。このように、今でも、子どもたちがLRAに誘拐されています。しかし、テラ・ルネッサンスへの信頼が積み重なり、逃げてくる元子ども兵の人数・頻度も、加速度的に増えています。紛争終結に向けて、たしかな手ごたえを感じています。





2026年2月、コンゴ出身の元子ども兵たちを、片道2日の陸路で、保護してきました。表情がこわばっている元子ども兵たちですが、おどけた表情の小川に、つられて白い歯を見せる子も。

彼ら・彼女らが帰れるように状況を整え、徹夜で調整し、国境を越えて迎えに行ったのは、小川真吾。

ですが、故郷への道連れ戻してくれた人は、支援者の皆さま、お一人お一人でもありません。

どうか、彼らの行く末を、これからもあたたかく見守ってください。残されたあと500人の子どもたちをも、私たちは見捨てません。全員を連れ帰り、この紛争を終わらせる。どうか、引き続きお力を貸してください。



# 故郷への道を、連れ戻してくれた人



写真：海外事業部長 小川真吾。2026年2月コンゴにて、元子ども兵たちを施設へ保護した際の様子

スマイルハウスから（元少女兵へのインタビュー）  
すでに社会復帰を果たし、今は、洋裁と農業で身を立てている、マーガレットさん（仮名）に話を聞きました。インタビューの一部を紹介します。

最初に、今日の気分を聞かせてくれますか？  
「今日はとてもうれしいわ。自分でつくった商品を持ってきているの。それが売れたら、子どもの学費の足しになるでしょう」（スタディツアーの参加者が来ており、マーガレットたちはバザーを催すことになっている）  
「戻ってきてから、つらいことはあった？」  
「コミュニティの人たちと、うまくいかなかったこと。最初はなかなか通じ合えなくて…こんなはずじゃないって、よく思ってた」  
「ただ、テラ・ルネットでは色々教えてもらった。それも大きな変化ね」  
「マーガレットは笑顔を見せました」  
「その前は、教育を受けたことがなかったから。テラ・ルネットは文字も教えてくれた。自分の名前が書けるようになったのは、とても大きいことよ」

「あなたはずらい体験をしたと知っています。その前後での変化について、教えてくださいませんか？」  
「私に起きたことは…この指の形を見たらわかると思う。元はこうじゃなかったわ」  
「マーガレットは右手に視線を落としました。1本の指は、不自然にねじれた形で固まっているようでした」  
「テラ・ルネットは、私たちが愛してくれる。そのやり方が好き。私たちと共に生きて、対等に交流してくれる、そのことが、とても幸せに感じるの。ずっと変わらないでいてほしい」  
（外はパーティーの準備で、音楽が流れている）  
「にぎやかなのが好きなの。だから今日は楽しいな」  
インタビューを終えたとき、アチヨリ語の通訳をしてくれたスタッフのレベッカは「彼女たちは『元子ども兵』である前に、一人一人名前があって、私たちと同じ人間なの」とかみしめるように言っていました。

（インタビューと文 広報室 下野）



# ウクライナ 希望の拠点を、地域へ

## 長引く戦禍の中、生活に困難を抱える人々を支える総合福祉センターが、ついに完成！



日本の支援とウクライナの協力により完成した総合福祉センター前で、引き渡し式典の記念の写真撮影（2026年3月30日）

ウクライナ西部での支援は、2022年3月、緊急支援として始まりました。

しかし現地の状況は、想像をはるかに超えて厳しく、目を疑うようなものでした。私たちは「一度きり」ではなく、継続して支援する必要があると判断しました。

その中で、ザカルパッチャ州ベレホヴェ市で建設に取り組んできた総合福祉センターがついに完成しました。

完成にあたり、創設者の鬼丸昌也と事務局長の佐々木が現地を訪問し、4年間にわたり支援を続けてきた駐在員のコーシャや現地協力団体の皆さんとともに、あたたかな雰囲気の中で式典が行われました。



フラワーアレンジメントは日本の国旗へのオマージュ



プロジェクトを推進してきたコーシャ。感慨もひとしお



式典を祝福した司教から感謝状を手渡された鬼丸昌也



建物入り口の什器テラ・ルネッサンスの名が刻まれた



桜と藤の植樹式。シャベルをとる佐々木は、ウクライナ危機の際に最初に現地入りした。あれから4年…

このプロジェクトは、日本政府の開発援助から資金を得て、2023年に開始しました。しかし急激な円安と物価高騰、徴兵による人手不足、建物の基礎の問題など、想定外の困難に次々と直面しました。周辺国からの人員や資材に頼ればもっと早く完成できたかもしれませんが、私が、私たちは、現地の方々の友情と、地域の資材を活用し、地域経済を活性化することにこだわって、粘り強く進めてきました。当初の予算を超える厳しい状況に直面したときは、現地の方々の友情と、日本からのあたたかいご支援、とりわけ複数の仏教団体からの力強い後押しにより、乗り越えることができました。完成した施設は、地元のキリスト教系支援団体によって運用されていきます。支援物資の保管や炊き出しの拠点となり、ここから、人々のもとへと支援が届けられていきます。式典では、中庭に桜と藤の木が植えられました。桜は日本を象徴し、藤は浄土真宗本願寺派からの支援を記念して選ばれたものです。やがてこの場所で花を咲かせ、人々の目を楽ませるでしょう。この施設は、完成したことがゴールではありません。戦禍の中にいる方々と私たちがつながりあい、支援が広がる出発点です。

## 「支援」について考える—— 小さな暮らしを、支え続ける

ハンガリー事務所長  
コーシャ・バーリン・黎



私たちが日々向き合っているのは、戦禍のなかで生きる人々の、厳しい現実です。月に約80ユーロ（日本円で約1万4千円ほど）の年金生活で、食事も満足にできない高齢者。家族が戦地に向かい、そのまま戻らない——そんな状況も、決して特別なものではなくなっています。私たちは、炊き出しを行い、できあがった食事や物資を、一人ひとりのもとへ届けています。一人暮らしの高齢者の家を訪ね、温かいスープを手渡す。両手で、うれしそうに「ありがとう」と受け取ってくれる姿に、かみしめる思いがあります。

本来、テラ・ルネッサンスの活動の根幹にあるのは「自立支援」です。紛争の被害を受けた人々が、自らの力で再び立ち上がるための支援を続けてきました。しかしここ、ウクライナ西部で出会う人々の中には、目が見えないお年寄りや、働きたくても働けない方、寝たきりの方もいます。国内外からの『支援の空白地帯』のなかで、取り残されている人たちです。たとえそれが自立支援とは異なっても、人として手を差し伸べること——それは、支援者のみなさまもきつと望んでいることだと、私たちは信じています。

町の墓地に供えられた花は、つい最近、人が亡くなったことを意味し、国旗は戦死者であることを示しています。

人々が本当に求めているのは、明日の食事や、家族が無事に帰ってくることで。小さな暮らしを支え続けること。キッチンで料理をつくり、手渡して届ける。その積み重ねのなかに、確かなつながりが生まれています。

式典が行われた3月末、ウクライナでも桃の花が、春の訪れを告げていました。どんな状況のなかでも、季節は巡り、日常は続いていきます。小さな営みを守り、希望をつないでいきます。

季節はイースター（キリスト教の復活祭）。炊き出しのキッチンポイントで、お祝いのパンをたくさん焼きました。温かいスープや料理とともに1軒1軒届けます。（写真左は現地を訪れた鬼丸昌也）



（インタビューと文  
広報室 下野）



# ラオス 懐かしい景色に、不発弾が埋まる地で

2026年3月、私はラオスの活動地を訪問しました。駐在員の岩村華子に同行し、小学校での不発弾回避教育の現場や、生計向上支援に取り組む様子を視察してきました。ラオスのあたたかい人々の日常を取り巻く危険と、そこから未来を変えようとする取り組みについてレポートします。

広報室マネージャー  
下野久美



ラオス・シエンクワン県の小学校には、穏やかでどこか懐かしい光景がありました。朝は全校生徒の元気な体操をはじめ、授業中は熱心な先生方の声が響きます。お昼休みには、子どもたちが鉄棒をしたり、思い思いに遊ぶ校庭を、牛がのんびりと通り抜けていきました。

## 爆弾の種類を学ぶ子どもたち

ラオスには、ベトナム戦争時代、9年間にわたってクラスター爆弾が投下されました。今も残る8000万発の不発弾が、農業開発や生活の安全を脅かしています。

『爆弾処理中・立ち入り禁止』の看板をあちこちで目にしますが、今の子どもたちが大きくなって、まだその処理は終わりません。子どもたちは、ボンビーと呼ばれる子爆弾を見分け、見つけたら大人に教えるといった行動をとるために紙芝居や、歌やカードを使いながら、爆弾の種類を学んでいました。



廊下で待機中、食べなさいと先生がくださった、モンカイという果実。



しめしめ大成功！と喜ぶ仕掛け人たち。この後、停電が待ち受けていることも知らず、笑顔です。



アニメの上映会。全校生徒に見せたかったのですが、設備上、2年生のみの上映になりました。廊下からのぞく子どもたちも。

教室でアニメ映画を上映！  
ストーリーの山場で停電に…

授業のあとで、日本のアニメ映画の上映会を行いました。見学をさせてもらうので、お返しに何かしたいと考え計画したものです。子どもたちが集中して見ているとき、スクリーンが、突然真っ暗に。ラオスでは、停電は日常茶飯事。しかし、アニメのストーリーは山場です。急ぎよ、台の上にパソコンを置き、続きを再生しました。子どもたちは、再開した小さな画面を食い入るように観て、上映が終わると、顔を輝かせて教室を出てきました。

廊下に立っている大人の前では、ちょこんと腰をかがめて、通り抜けます。その姿がかわいらしくて、思わず笑みがこぼれました。

**THANK YOU**  
教室の壁に貼ってある不発弾回避教育ポスターは、皆さまのご寄付が形となったもの。ラオスでは1000円で3枚印刷できます。小学校や幼稚園で活用しています！

## ラオスで出会った少女

パナ・ヤンさん（8歳）。ラオスに住む山岳少数民族、モン族の少女です。5歳の時に、家での事故で片目を失明しました。事故の原因は、裏庭でお母さんがゴミを燃やしていた時に、その熱で土の中に埋まっていた古い銃弾が爆発したこと。ラオスに残された戦争の爪あととは、こんなにも身近にひそみ、今も人々を苦しめています。

大人からの質問に、恥ずかしそうに首を振るパナ・ヤンちゃん。ご両親は、外見のことで友だちができないのではないかと心配しています。結婚するときに見た目が障害になるのではないかと心配しています。(写真左はお母さん)



▼手術のための目の検査を受けました。機械の中に入るのが怖かったけれど頑張りました



### ▼事故が起きた庭



大きな音と悲鳴に、近所の人々も駆けつけました。パナ・ヤンちゃんは、当時のことは覚えていないそう

### ▼3人の妹たちと



パナ・ヤンちゃん目の目の中には、まだ、銃弾の破片が残っています。テラ・ルネッサンスでは、未来あるパナ・ヤンちゃんのために、眼球を摘出し、義眼を入れる手術を支援することにしました。手術は、今年の5月に予定しています。どうか幸運を祈り、あたたかいご支援をお願いします。

テラルネ 寄付



※いただいたご寄付はテラ・ルネッサンスの活動全般に使わせていただきます。





# 別名、“愛蜂家” 勝又颯大さん22歳、 養蜂歴12年

ラオスでは、不発弾事故被害者や地域で困難な生活をしている方々のために、ハチミツ事業が進行中です。昨年十月に「養蜂協同組合」が認可を受けました。さらにしっかりと技術を学び、質のよいハチミツを作れるようになるため、日本から迎えた養蜂専門家が勝又さん。  
十歳で養蜂に目覚め、蜂への情熱が冷めやらない勝又さんを、ラオススタッフたちは「愛蜂家」と呼んでいました。



ラオス事務所にあるハチミツの製造・管理室。「ここまで衛生管理を徹底しているのは日本でもなかなかないですよ!」と胸を張る勝又さん

支援対象の方々が作ったハチミツは、高級ハチミツとしてお土産屋さんやスーパーに並んでいます!



上：ラオス事務所スタッフのキックさんと岩村土産店にて



「この子が門番で…」蜂の役割を教えてくれる勝又さんは、一匹一匹を「この子」と呼ぶ

子どもの頃あまり学校に行かなかったのだが、蜂と出会って夢中になったという勝又さん。情熱を傾ける勝又さんを、ご家族は応援してくれたそうです



勝又さんが活動するのは、外のフィールド。ラオスの3月はあまりに寒く、途中、村人のご自宅で火にあたらせていただきました



そのいりりで、『五徳』として使われていたものに、目を奪われました。これも爆弾だったのです。「無反動爆弾」といって、もう危険はないものですから」と教えてくれた勝又さん。蜂以外のことも、よくご存じです



「いいハチミツができていますよ!」

ラオス事務所スタッフからは専門家として頼られると共に「みんなの弟」として愛されている勝又さん。テラ・ルネッサンスでの任期は今年の7月まで。ラオスでの経験を糧に、「愛蜂家」としてますます活躍されることでしょう!



テラ・ルネッサンスが導入した『不発弾回避教育』を持続し、子どもたちの安全を守りつづけるためには、学校の先生方が自ら覚え、さらに発展させていってほしい。小学校の職員会議でこやかに訴える岩村。

## 子どもたちの安全と、未来を守るために。 国の教育システムを変えたい。

ラオス事務所プロジェクトマネージャー 岩村華子

「本来であれば、子供たちの命と未来を守ることは、国（ラオス政府）が行うべきではないでしょうか？」  
ラオス事務所プロジェクトマネージャーの岩村華子に、問いかけてみました。

「本当におっしゃる通り、国がやるべきことだと思います」岩村は答えました。

「ただ、この学校だって日本の支援で建てられていたり・・・今のラオスでは教育に割ける予算がほとんどないのが現実です」

「でも今のままでは——」  
岩村は続けました。  
「できるだけ多くの子どもたちに危険性を伝えたいのに、今はどうしても届く範囲が限られてしまっているんです」

テラ・ルネッサンスが、現在、継続的に関わっている学校は25校。シエンクワン県にはまだまだ他の学校もあります。

「学校の先生の養成校があるんです。夏休みに現役の先生たちが集まって、研修をするんです。そこに先生向けのトレーニングプログラムを入れたい、と政府に提案しています」

「統一したカリキュラムを、みんなに持ち帰っていただければ、各学校で実施できますよね。そうすれば、私たちが去った後も、教育は『国の仕組み』として定着しますから」

この変革のため、岩村は、ラオス国内で活動する他団体にも呼びかけ、連携の強化にも取り組んでいます。

「不発弾被害をなくすというゴールはみんな同じ。組織の垣根を超えて、『シエンクワンモデル』をつくり、それを他地域に広げたいんです」

赴任したラオスで、国の教育システムを変え、不発弾による事故から、人々を遠ざけたいと、岩村は力づくよく活動しています。そして、岩村の背中を支えているのは、平和な未来をつくりたい、という支援者の皆さまの願いです。

▼ 岩村華子のエネルギー源は、ラオスの名物、カオピアック。もちもち食感の麺料理です。自分でスパイスを調整し、レモンを絞ったり、レタスをちぎって入れたり好みの味に。お昼はこれで決まり!



▼ 学習用ポスター（ボンビー、地雷、銃弾など）と子どもたち



# 食 ボーン!



## カラモジャ 収穫の季節

2026年3月、ウガンダ、カラモジャの活動地を訪問しました。荒野に広がる緑の畑、そして大きな灌漑用の池。誇らしげにトマトにかぶりつき、美味しい顔を写真に撮らせようと見せつけてくる村人たちの姿は、ユーモラスでもあり、感動的でした。  
文・広報室 下野

自分たちでつくった野菜のお味は…?

「うまいよ!」



葉物野菜の調理法を習ったり、栄養学のレッスンも受け始めました。「野菜は体にいいです」先生の話にうなずいています。学ぶことも楽しい!



2022年秋頃。雑草で飢えをしのぎ、体力のない乳幼児やお年寄りから、飢餓が原因で命を落としていました。テラ・ルネッサンスも、緊急食糧援助をおこないました。



# 獲る!



大漁だよ!



池に帰っていくわ!

バケツを飛び出した魚を捕まえる

魚だ!見せて!



売れた!

新米漁師たち (スタッフ・村人混合チーム)

2022年、飢餓で毎月100人以上の人々が命を落としていた——ウガンダカラモジャ地域、コテイド県。半乾燥地域で、農業は不可能といわれていました。常に食料不足で、欧米からの食料支援で命をつなぐしかない。そんな中、150世帯の人々が、テラ・ルネッサンスとともに『灌漑農業』に挑戦することを決意しました。私たちは天水をためる巨大な池を掘り、それがうまく機能して、『共同農場』と決めた場所に水をひくことができました。わずかな配給を受け取るために差し出していた手にクワを持ち、人々は未来を信じて、土を耕してきました。収穫したトマトは、最高のごほうびです。さらに、昨年、灌漑池に放った稚魚が育っていることを確認し、今回は初めての漁にも挑戦です。当然、この中に漁師はいません。「魚、逃げていくよ」「水が冷たい」と苦戦しながらも、何度も場所を替えて追い込み漁にトライしました。



コーヒー どうぞ

左:カラモジャ事務所 長 川島綾香

フィールドから事務所に帰り、日本から持ってきたコーヒーでひと息。駐在員の川島がお湯を入れてくれました。やかんがなければ、鍋を使うのがテラ流です。



「駐在員は汗をかいて泥にまみれてなんぼです!」

と駐在員、川島綾香。勉強になります!



駐在員ではありませんが、理事長の吉田とスタッフ今成も、ちゃんと泥にまみれました。



# カラモジャ さらなる挑戦の始動



魚の養殖を推進するため、新しく養殖池を掘ります。サイズも工法も、手探り。重機ではなく、人力で掘る。地域の皆の雇用にもつながる。それが川島綾香の計画です。早く行きたければ一人で駆け遠くへ行きたければ皆で行け。アフリカの諺のように、取り組んでいきます。



おうちを囲む柵はかんじょう！  
入り口のサイズは、日本の茶室の潜り戸みたいに小さいです

## カラモジャで おじゃましました



スタッフ 右から  
今成祥（あきら）、  
スティーブン、  
川島綾香、  
吉田真衣（理事長）



来客用のベンチがわりの木。  
こちらも、オブジェと言っても過言ではない芸術的なフォルム。



テラ・ルネッサンスの支援を受けて共同農場ではたらく方の家庭訪問に同行しました。しっかりと組み上げられた柵は、素晴らしい作品のよう。さらにするどいトゲを持つ枝を組み合わせると、防犯対策もばっちりだとか。これらは主に、女性の仕事なのだそうです。

こちらは別の場所です。個人宅ではなく村の広場に設けられた小屋に招待されました。ここで、造りたてだというアプティアというアルコールの入った飲み物でおもてなしを受けました。ちょっとだけ味見・・・

個人的な印象ですが、村の小屋は、まるで数寄屋造りの茶室でもてなされているようでした。カラモジャには、日本人のわびさびがある。と、勝手な感想を抱きました。みなさんは、どう思われますか？

（文・広報室 下野）



2023年にスマイルハウスを訪れた酒向幸枝さん。  
現地での体験が人生観を変え、立ち上げた”世界平和事業”とは!?

## 活動地を訪れて、人生が変わった！ 私と「ピース@世界征服を目指すクマ」

文：酒向幸枝（さこう ゆきえ）さん



本業は株式会社Sceneryというマーケティングの会社を運営されている酒向さん。世界平和について考える中で「ぴーくま」くんのキャラクターがひらめき、実現するために、なんとまんがの描き方から習ったそうです。4コマまんがのストーリーもご自身で制作中！

テラ・ルネッサンスの活動地を訪れたとき、私ははじめて「世界の現実」に触れたような気がしました。それまで、紛争や貧困については知っているつもりでいました。ニュースや記事で見ても、「大変なことが起きている」と理解していたつもりでした。でもそれはどこか、「遠い国の話」として受け止めていたのだと思います。現地で出会った元子ども兵の若者たちは、「かわいそうな存在」ではない。一人ひとりが、自分の人生を生きている人たちでした。笑ったり、冗談を言ったり、これからのことを話したりする姿を見て、「同じなんだ」と感じました。



「ピース@世界征服を目指すクマ」略して「ぴーくま」

生まれた場所がたまたまウガンダだったか、日本だったか。それだけの違いで、不条理な搾取に晒される。そんな構造が当たり前のまま残り続けること自体が、おかしい。この歪んだ構造を、このまま後の世代に引き継いでいいはずがない。この現実を前にして、「遠い世界の話」ではいられなくなりまして。同じ世界で起きている、自分と地続きの問題として、考えずにはいられませんでした。「自分に何ができるのか」と向き合うようになりまして。

この事業は、一言で言うところの「日常の買い物や消費が、そのまま社会貢献につながる仕組みを持ったキャラクタービジネス」です。一部の人の善意だけに頼るのではなく、日常の中で自然に豊かさが循環し続け、これまでその恩恵を受けにくかった人たち（例えば途上国の貧困層など）にも届く仕組みを作りたい。そして無理なく続いていく仕組みにしたいと思いました。それからもう一つ、私自身は、元々「世界平和」や「慈善事業」にはまったく興味がなかった人間でした。でも、「他者に興味を持つ」きっかけをいただいたことで、価値観が180度変わり、日常生活の中で感謝や感動が増え、人生の幸福度が爆発的に上がりました。ですから、「他者に関心を持つ」ことは、その人の人生にも良い影響がたくさんあると感じています。この事業を通して、世界中でそういうきっかけ作りを出来たらいいなと思っています。

### ■「ピース@世界征服を目指すクマ」事業の主な取り組み

- ・キャラクターグッズの売上の1~2割を寄付として循環（寄付先からお礼が届く仕組み）
- ・企業とのコラボ商品やイベントの開発・学校等での世界平和教育ワークショップの実施



詳しくはぴーくま君のサイトをご覧ください→



思い出の一枚：  
スマイルハウスの歓迎の歌とダンス。  
物凄いエネルギーに圧倒されました。



2026年2月、ウガンダ、グルのスマイルハウスにて。この日は、日本からスタディツアーでやってきた高校生たちのために、スマイルハウスに集まってくれた面々。彼女たちは全員が、元少女兵です。帰還から10年以上経っても、体の傷やトラウマを抱える方も、中にはいます。それでも、彼女たちがお互いに強い友情で結ばれて、励ましあっていたことに希望を感じました。談笑していた彼女たちに「みんな、すごく素敵！ポーズをとって！」カメラを向けると、屈託のない笑顔で応えてくれました。

文・広報室 下野



## 事務局本部

現場から遠い場所で、一番近くに寄り添う。  
「あるもの探し」で考えるバックオフィスの役割

文・事務局本部 高木 瑞希（たかぎ みずき）

## 京都から組織基盤を支える

事務局本部では、財務、労務、総務、寄付管理、DX推進などバックオフィス業務全般を担当しています。

2026年度、私たち事務局本部は「あるもの探しで築く、組織基盤と働きがい」というスローガンを掲げています。テラ・ルネッサンスが大切にしている理念、データベース、そしてともに働く仲間の力——これらの「資産（あるもの）」を再発見し、磨き上げることで、よりしなやかで強い組織を目指しています。



事務局本部メンバー：右から寄付管理担当 上野知子、総務・総務担当 高木瑞希、財務・総務シニアマネージャー ジャコブ 萌、事務局長 佐々木純徹

## チームワークで組織の「根っこ」を強くする…ヒト・モノ・お金の管理

「ヒト（人材）」の基盤をつくる…スタッフ一人ひとりが成長を実感し、持続的に活躍できる環境を目指しています。近年では、生成AIの活用による業務効率化を推進し、職員がより創造的な活動に集中できる「働きがい」のある職場づくりを進めています。

支援者さまとの「歩みの記録」を資産に変える…これまで皆さまからお寄せいただいたご支援の記録を、大切にデータベース化しています。自律的かつ透明性の高い情報管理体制を整えることで、組織の意思決定のスピードを上げ、また、日頃からご支援いただく皆さまとの信頼関係の構築にも努めています。

「お金（寄付）」を確実に平和のチカラへ…継続的な活動には、安定した財務基盤が欠かせません。定期的な財務会議を通じて、資金繰りを常時管理し、現場のニーズに即応できる体制を整えています。

## 支援者と現場の「想い」を繋ぐ架け橋として

事務局本部は、皆さまからのお問い合わせを直接お受けする窓口も担当しています。日頃のご支援の中で、「住所や会費の支

払い方法を変更したい」「領収書について聞きたい」といったお手続きや、寄付に関するちょっとしたお困りごとはございませんか？

バックオフィスは、現場から物理的な距離はありますが、想いの距離は一番近くにありたい。そう願いながら、皆さまから届くご寄付や情報を大切に扱い、支援現場へと繋いでいます。

皆さまから託された大切なご寄付を、1円でも多く、1秒でも早く現場へ届けるための「平和の土壌」を耕すこと。それが私たちの誇りです。皆さまが安心して平和への想いを託せるよう、丁寧なコミュニケーションを心がけてまいります。何かございましたら、どうぞお気軽に事務局本部までご相談ください。



↑京都の街並みに溶け込む、春の静寂。事務局裏の公園には、今年も美しい桜が咲きました！（2026年4月撮影）

NEW

洪 童恩（コウトウオン）  
3月入職 事務局本部



初めまして。京都事務所経理・会計担当洪童恩（コウトウオン）と申します。今年、3月に入職いたしました。

前職では原価計算および会計分析に従事しておりました。今回、非営利組織（NPO）への転職を決めたのは、もともと社会問題に関心があったことに加え、2024年に大病を患い入院したことが大きな転機となったためです。病床で「もしこれが人生の最後だとしたら、少しでも社会に貢献できることを成し遂げたい」と強く感じ、快復後、NPOの世界で働く決意をいたしました。

その後、2025年に台湾政府の「青年百億計画」に参加した際、テラ・ルネッサンスとのご縁があり、そこで初めて「元子ども兵」という深刻な課題を知って、大きな衝撃を受けました。台湾人として世界は不安定な情勢であると感じているからこそ、これまでの専門知識を活かし、世界の平和に向けて尽力したいと考えております。これからどうぞよろしくお願いいたします。



ウガンダの広報ビデオについての討論と編集

NEW

中村 友紀（なかむら ゆき）  
4月入職 啓発事業部



はじめまして、4月から啓発事業部のファンドレイジング担当として入職いたしました、中村友紀と申します。

私は幼い頃から、「生まれた国や地域に関わらず誰もが希望を持って人生を歩める環境づくりに力を尽くす」という人生目標を持ち、これまで国際協力の道を歩んできました。この度、唯一無二の意義深い活動を粘り強く続けるテラ・ルネッサンスで世界平和への歩みを共にしたいという願いが叶い、大きな喜びを感じるとともに、身の引き締まる思いです。

啓発事業部の一員として、多くの皆さまに現地の状況を丁寧にお届けし、皆さまの温かい想いを世界平和の実現に向けた力へと変えていくことが使命だと考えています。サポーターの皆さまとお会いできる日を楽しみに、誠心誠意努めてまいります。どうぞ宜しくお願いいたします。



ラオスの夕日の名所プーシーの丘にて。穏やかな光に包まれて。

## ～新インターンズ紹介～

NEW



安田 雪乃（やすだ ゆきの）  
広報室インターン

国際協力分野での自分軸を模索しながら、インターンでの学びを将来に繋げたいです。



船渡 啓翔（ふなわたり ひろか）  
広報室インターン

今いる場所で、自分にできることから国際協力に関わっていきたいと考えています。



藤井那菜（ふじい なな）  
広報室インターン

将来の国際機関での政策提言に向けて国際協力の現場で学びたいと考えています。

## あなたの「願い」を、平和をつくるチカラに。

テラ・ルネッサンスのすべての活動は、皆さま一人ひとりのあたたかいご支援に支えられています。遠い国の誰かに想いを馳せる「寄付」。眠っているモノに、新たな使命を託す「リサイクル」。新しい世界に飛び込む「イベント参加」。あなたに合った方法で、平和をつくる、はじめの一步を踏み出しませんか。

わたしにできることで、いま、参加しよう！

テラルネ 寄付 🔍

[www.terra-r.jp/support/](http://www.terra-r.jp/support/)

今回のみ寄付をする | 毎月寄付をする | ふるさと納税をする  
商品やサービスで支援 | 知る・参加する



ご寄付についてご不明な点がございましたら、下記までお気軽にお問い合わせください。

**Eメール**： [contact@terra-r.jp](mailto:contact@terra-r.jp) **電話**（平日 10時半～18時）： 075-741-8786

※ 現在お電話は受付専用です。ご用件をお伺いし、折り返しさせていただきます。

ご寄付は税制優遇の対象となります。領収書は翌年1月にまとめて発行いたします。

## Peace Builders 平和をつくる仲間たち



こんにちは！テラ・ルネッサンス広報室の下野です。

2月15日から3月14日まで一か月間、スタディツアーのサポート業務を兼ねて、海外の事業地を見て回る機会がありました。タイ事務所、ウガンダのスマイルハウス、カラモジャ、そしてラオス。支援対象者の方々や、活動の様子を取材しましたが、その中で、普段会うことのない現地スタッフとの時間が、かけがえのない宝物になりました。

写真は、カラモジャスタッフのダイアナ、ゴレッティと川島綾香のスリーショット。実は、農場からの帰り道、皆で乗っていたバンがガス欠で立ち往生してしまったのです。プスンプスン・・・と車が止まると、そこは見渡す限りの平原でした。

ガソリンが届くまでの時間は、人生でいちばん平和なひと時だったかもしれません。日本の押しずもうを教えてトーナメントをし、ポーズをとって撮影会。さらに、空中に浮いて写真を撮ろう！とジャンプをはじめたのが、表紙の写真です。（通りすがりの羊飼いの子どもも一人、混ざっています）

お昼ご飯は毎日、同じ豆とイモの給食が出る簡素なカラモジャ事務所ですが、心は王様のように豊か。愛すべき仲間たちです。

## 微力だけど、無力じゃない

国連 ECOSOC 特殊協議資格 NGO  
認定 NPO 法人 テラ・ルネッサンス

〒600-8191, 京都市下京区五条高倉角堺町21番地 Jimukinoueda bldg.403号室  
Tel: 075-741-8786 Email: [contact@terra-r.jp](mailto:contact@terra-r.jp)